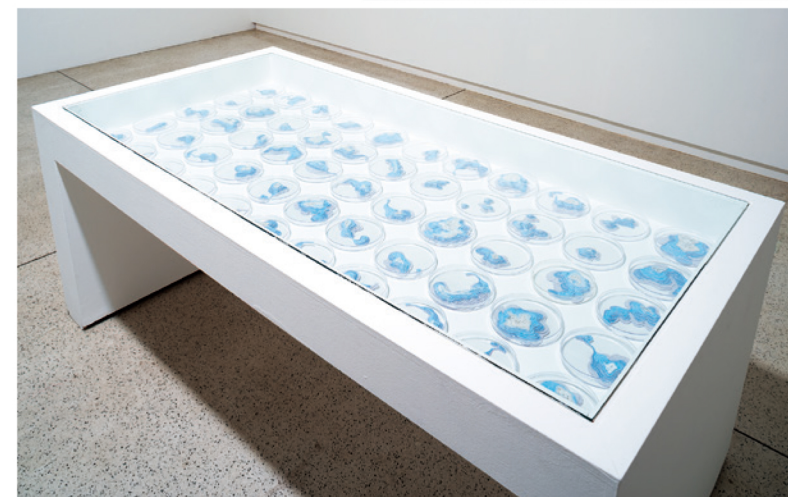
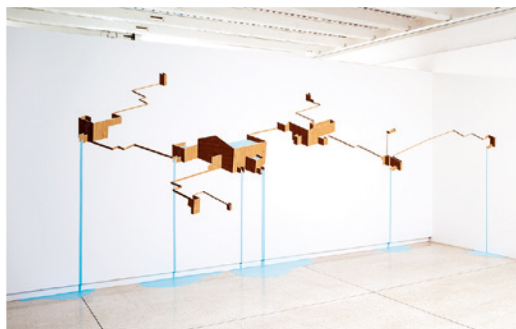




松下マルタ もしも私が小鳥で、髪の毛を見つけたら… 2012-16



上——石田ジュリア 無題 2016
下——上西エリカ 離島 2014-15



上——新谷アリセ 花ふだ 2012
下右——水谷エリカ セロトニンとドーパミン 2016
下左——工藤ジェームス プシャージニョ 2016

Curitiba クリチバ

仁尾帯刀=文
Text by Tatewaki Nio
(Photographer)



オスカー・ニーマイヤー美術館の外観

「日本再訪(非)共通のまなざし」展
Olhar Incomum :
Japão Revisitado
3月16日～6月26日
オスカー・ニーマイヤー美術館
Museu Oscar Niemeyer
* Rua Marechal Hermes
999, Centro Cívico, Curitiba
Tel. +55-41-3350-4400
10:00～18:00 月休

多種多様なアイデンティティーの模索から ブラジルの日系アーティストのいまを問う

日本と友好の絆の強いブラジルで日系アーティストのグループ展「日本再訪: (非) 共通のまなざし」が開催された。

昨年は、日本ブラジル外交関係樹立120周年であったが、長らく続いた日本移民の歴史により、現在ブラジルにはおよそ150万人の日本人、日系人が暮らしていると言われる。すでに3世が社会で活躍する時代で、日本語を話さない人口が大半を占めるが、食生活など日本の習慣を先代から受け継ぎ、日本に関心を持つ新世代は多い。日系人のブラジル社会への同化が進むなかで、日系アーティストとはいったい、どのような存在なのだろうか？ 本展は、その問いを一つのかたちにしたものだ。

参加アーティスト21人のうちブラジル在住日本人を除くと、大半がサンパウロ州、パラナ州の出身で、ブラジルにおける日系人の分布を反映している。出身地の

近似にかかわらず、それぞれの日本文化との距離は大きく異なる。

日系社会の色濃いパラナ州ロンドリーナで育った上西エリカは、自らの文化的アイデンティティーは、ブラジルよりも、日本と日系社会の間にあると言う。「私がアートで表現したいことの一つは、ブラジルの日系社会が思い描く、独特の歪んだ日本像の再現です」。今回展示した《離島》は、日本各地の離れ小島に、日本から遠い日系社会で育まれた自らのアイデンティティーを重ねた作品だ。

サンパウロを拠点にする新谷アリスは、「日系アーティスト」という枠組みに違和感を覚える。そのような分類は、自らの創作への理解を狭めるものだと危惧する。複数の絵画からなる《花ふだ》は、そのタイトルから、日本の花札の模様の部分をモチーフとしたように思わせるが、実は、西洋中世のトランプやアフリカの図

像などが含まれている。様々な図像を混合することで文化的アイデンティティーの真偽を問う作品となっている。

武蔵野美術大学出身の吉沢太は、20年以上にわたってブラジルで活動してきた造形作家だ。立体オブジェ《カラバッサ》は、あらゆるものに存在する内と外、そしてそれを超越した時空や次元の意識化を誘う作品だ。日本と地理的に反対に位置し、価値観が大きく異なるブラジルの半生が制作の礎となっている。「日系アーティスト」という枠で作品を紹介しながらも、実はその枠組みが、作風や表現手段、あるいはアーティストと日本との距離において多様であることを表現したかったのです」と、本展のキュレーターで、サンパウロ連邦大学で東洋美術史を教える岡野道子は語る。

本展では、陶芸、漆絵、俳句あるいはグラフィティといった従来の西洋美術の潮

流がアートと見なしてこなかった分野の作品も多数展示された。「西洋のコンセプトによる美術史が終焉を迎えている、とよく言われますが、日本では従来からある芸事や工芸などもアートだったのです。この日本のアートに対するとらえ方は、今後の美術史の構築やアートの発展の上で、改めて評価、考察されるべきです」。

ブラジルでは近年グラフィティなどのストリート・アートが盛んだが、今回舞台となったオスカー・ニーマイヤー美術館は、中川敦夫、水谷エリカの作品など、本展でもって初めてグラフィティを展示した。「今後、4世、5世と日系人の世代がさらに経ると、ブラジル社会への同化がますます進み、もはや日系と枠組みの意味がなくなっていくと思います。だから、今こそ日系アーティストを研究対象とする価値があるのです」。



吉沢太 カラバッサ 2003